# 日々

nichi-nichi

summer

# 「日々のこと」

みなさんはじめまして、こんにちは。

『日々（にちにち）』は、

想像力を大事にすることをモットーとした《ヨミモノ》です。

知っている人からすればあたりまえのことも、

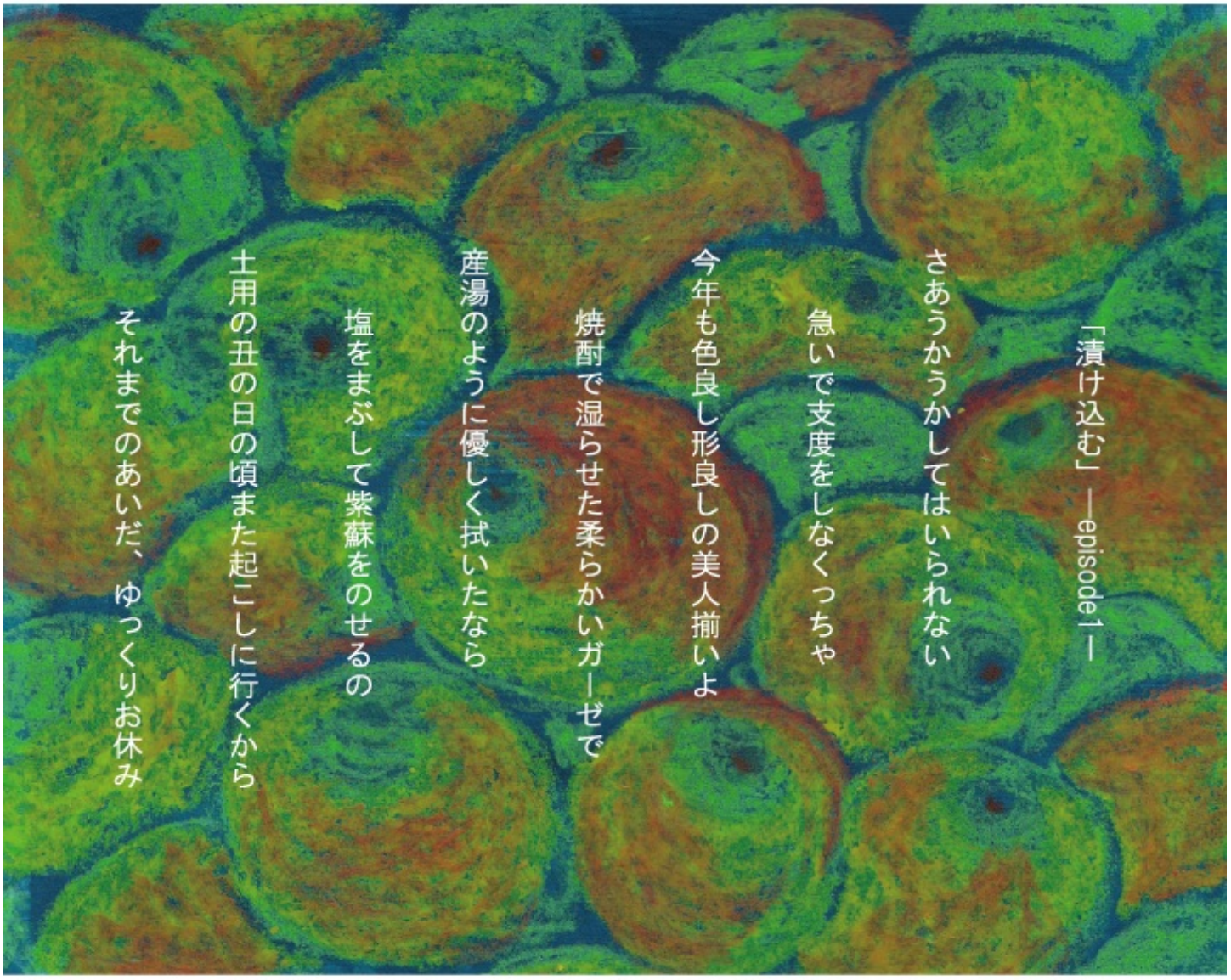
知らない人からすれば絶好の想像のチャンス。

日々（ひび）の想像は、頭の中の小旅行。

あなたの少しの時間のお供になりますように。

コダマ

ー夏の子どもたちー


「漬け込む」—episode1—
さあうかうかしてはいられない
急いで支度をしなくっちゃ
今年も色良し形良しの美人揃いよ
焼酎で湿らせた柔らかいガーゼで
産湯のように優しく拭いたなら
塩をまぶして紫蘇をのせるの
土用の丑の日の頃また起こしに行くから
それまでのあいだ、ゆっくりお休み

「干す」　―episode2―

もしもしお嬢さんたち、そろそろ起きて
太陽が雨雲に隠れる前に
紫蘇で色づいた綺麗な肌を
三日間陽に照らすのよ
そうそう、途中でひっくり返すのも忘れずに
この三日間はつきっきりで
雨に濡れないよう細心の注意を
大事にしすぎるくらい大事にしたら
きっとそれだけおいしくなる

表面に塩がふいて、キラキラと輝き出せば
愛おしさもひとしおね
三日目は夜風にも当てて
そうすることで、しっとりとなるの
さあ出ておいでお嬢さんたち
今年もうんと良いのができた
ひと粒ひと粒が赤い宝石のよう
見ているだけでじゅわっと唾が出る
ようやく今年の夏を迎える

# 名字のはなし

おもしろい名字、珍しい名字から思いついたことを自由にかきます

## 一.

（アジサカ）

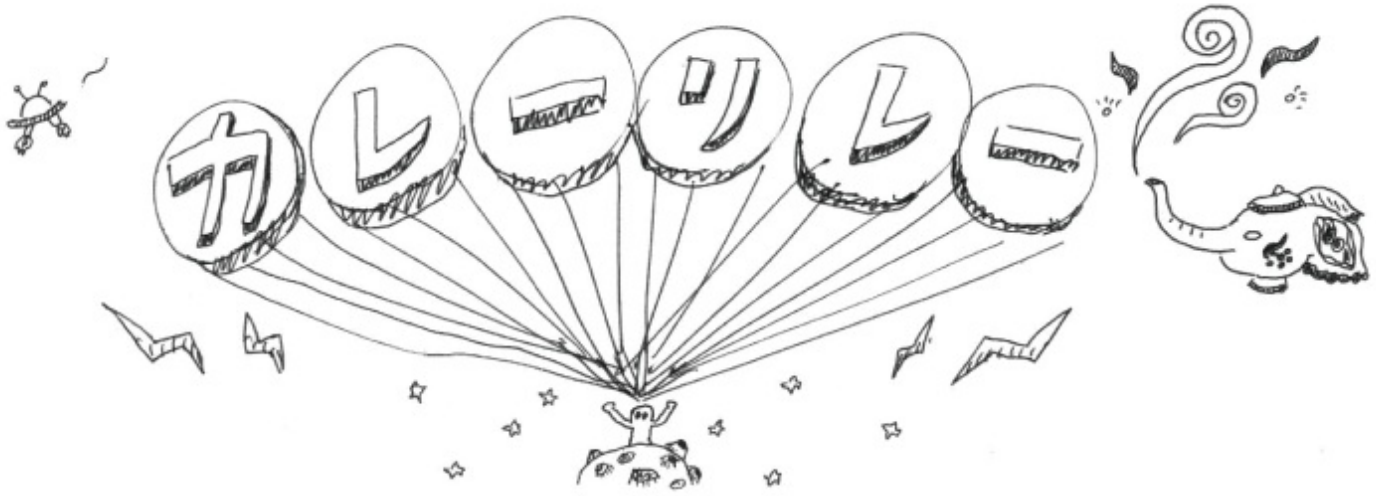
坂の上に住んでいるあのおじさんは
近所じゃちょっとした有名人で、
食卓（の魚、とくに鯵の普及活動に
熱心である。
変わっているが、無害で親切な
おじさんだと町内では認識されている。
ただ毎年夏になると
普及精神がピークになり、
持ち前の親切心で活きのいい
鯵を朝から晩まで家の前の
坂道に撒くので、その年の町内会長
がやめるように説得に当たるのが
恒例になっている。

「鯵坂さん」は最近出会った珍しい名字です。ちらっとインターネットで調べたところによると、「鯵坂」というのは九州あたりの名字のようです。そしてこれまたちらっと調べたところによると、長崎では鯵が豊富に獲れるそうで、「鯵坂」というのが九州あたりの名字らしいというのもなるほどです。ただ、いずれにせよちらっと調べただけなので、ほどほどにふうん、と思ってくださいますよう・・・

ところでわたしの知っている「鯵坂さん」はとあるギャラリーのオーナーさんなのですが、実際にお会いしたことはありません。わたしが一方的に知っているだけです。そのギャラリーには「米須(こめす)さん」という方もいました。「鯵」と「米」で日本の朝ごはんができました。さらに「豆ちゃん」という方もいらっしゃったので、「鯵」と「米」と「豆」で日本のスペシャル朝ごはんの完成です。なんて言っていると怒られそうですが、とにかく「鯵坂さん」というのは聞いただけで風景が浮かぶような名字です。この場合「坂」とうしろに付くのが大事で、もし「鯵」さんだったらそこまで風景は見えてこなかったと思います。お笑い芸人に「鰻さん」という方がいますが、「鰻さん」で見えてくる風景と、「鰻坂さん」で見えてくる風景は、ほら、違いませんか？相方さんの名前をとって「鰻橋さん」でも良いかもしれない・・・。そんな取り留めもないことばかり、いつも考えています。全国の鯵坂さん、いつもすてきなお名前です。ありがとうございました。

コダマ

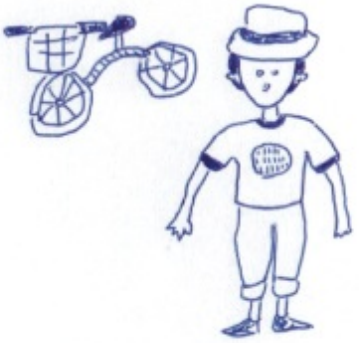
# カレーリレー




おいしいカレー屋さんが教えてくれるカレー屋さんはおいしいはず!
カレー屋さんに導かれカレー屋さんを巡る旅の記録です

KYOTO
SHIJO
TERAMACHI

# カレーリレーの地図



skoshi hanashi
すこしはなし
—summer—

朝早く、もらった自転車に乗って出かける。まだこの土地には不慣れであまり遠くにも行きたくないので、前にも通ったことのある道を選んで走る。このコンビニの前の道を左に。病院が見えたら今度は右で、あとはもうずっとまっすぐ。ああ、なんとなく思い出してきた。前に一度失敗した道だ。どこに出るんだっけ。そう、区民センター。その先にあるスーパーで買い物をしたあとに、道に迷って帰れなくなったんだ。今日は区民センターまでにしよう。それで、着いたらすぐ引き返そう。今すぐにでも引き返したい気持ちを我慢して、あと少し、あと少し、とペダルを漕ぐ。

五〇〇メートルくらい漕いだろうか、区民センターの四角い建物が見えた。駐輪場に自転車を止めて、手

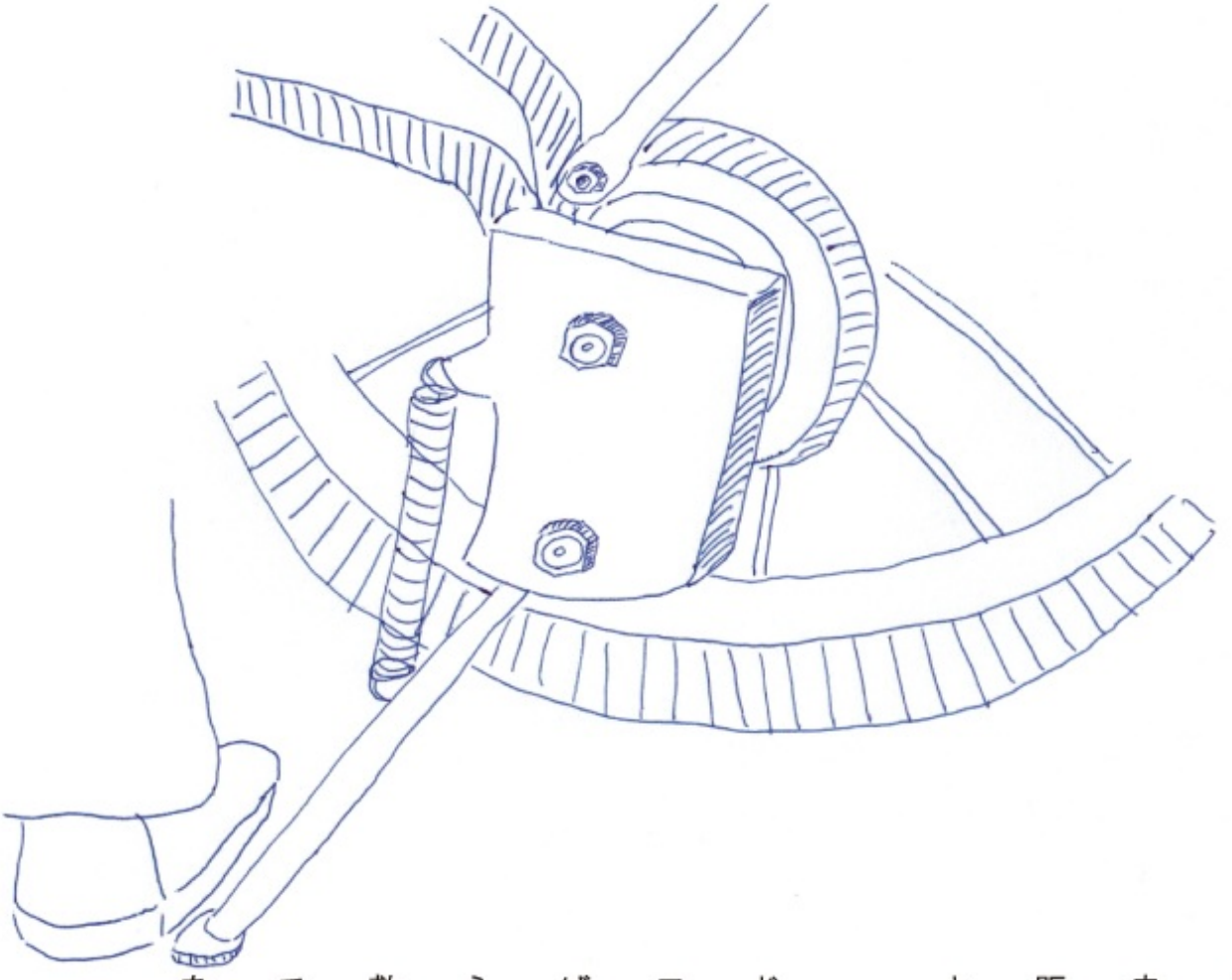
の汗をズボンで拭う。あんまり強くハンドルを握っていたのか、指先が少し痺れていた。特に用事も無いけれど、駐輪場を抜けて区民センターへ向かう。

敷地内には、朝のウォーキングや犬の散歩をしている人がまばらにいた。その中のひとりに、五メートル四方の広場を八の字に走り続ける彼女はいた。上下黒のジャージに身を包み、白いマスクを目の下まで引き上げて、燦々と照る陽の下をずっと同じペースで走っている。ずいぶんと暑そうな格好だが、彼女自身は平気らしい。あまり突っ立ってじろじろ見るのは良くないと思って、ほどけてもない靴紐を結び直しながら彼女の八の字に見入っていると、自転車の荷台に空き缶をたくさん乗せたおじさんが、わたしの傍に来て言った。

「どこの娘か知らんが、ああやって毎朝ここに来ては八の字に走ってるよ。昔はコーチも付いてたんだけどね。そのコーチが地区代表選手の専属になってからは、ああして毎朝ここで八の字に走ってる。フォームはきれいなんだけど、だめになっちまったんだろうねえ。」

そう言って自分の頭を差して、指先をくるくると回しながらその場を立ち去った。

彼女のフォームは確かにきれいで、動きのどこにも無駄がなかった。描かれる八の字も、科学館に展示してあった、地球から見た準天頂衛星の軌道のように正確で美しい。わたしはいつの間にか靴紐を結びなおすことも忘れて彼女の八の字に見入っていた。だってとても美しいけれど、どう見たって彼女は変だ。



どう見たって変なのに、彼女はおかまいなしに堂々と走っている。表情だってどこか誇らしげで、タイムとか距離だとかに追われている感じが全然ない。そのことがより一層彼女の八の字を美しくしているように思えた。

わたしは静かにその場を去り、駐輪場へと戻る。ハンドルに手を掛け、スタンドを勢い良く蹴り上げる。ファーン、と明るい音が鳴り響く。今日はうまく蹴り上げた。区民センターを出てまっすぐ走り、病院が見えたら左に曲がる。コンビニの前の道は右に。マンションの敷地内の駐輪スペースに自転車を止めて、一気に五階まで駆け上がる。良いものを見た、と声に出してその幸福をもういちど確認した。

—八の字の彼女—

# 八の字の彼女あとがき

この『八の字の彼女』は、朝一番に期日前投票をしに区民センターへ出掛けた日のことがモチーフになっています。わたしはこの春に大阪へ引っ越して来ました。自他共に認める方向音痴で、数ヶ月前には家から自転車で15分圏内の場所からの帰りに道を間違え、2時間あまり迷子になってしまいました。その時も区民センターからの帰りでした。わたしはどうやら外を歩くセンスがないらしい。ともかく、わたしにとって曰くつきのコースを通って自転車で区民センターへ行った訳ですが、そこで出会ったのが八の字に走る彼女でした。

彼女は色白で30代くらい、帽子を深く被って全身黒のジャージを着ていました。彼女はわたしが投票を済ませて帰る30分ほどの間、（本来なら5分ほどで済みますがトラブル発生。）ずっと八の字に走っていました。そこから生まれたのがこの話です。彼女が何者なのか、どうしてずっと八の字に走っていたのか、何も知りませんが、わからないなあと思いつつ書いたらこんな話ができました。

## end

イラスト＆文：コダマ

mail : codama235@gmail.com